View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

安藤 文四郎教授退職記念号によせて

社会学部長 荻 野 昌 弘

安藤文四郎先生は、1971 年に東京大学文学部を卒業後、東京大学大学院社会学研究科博士課程を経て、1976 年 6 月、千葉大学人文学部に助手として赴任されています。その後、1979 年に関西学院大学社会学部に専任講師として赴任され、1980 年に助教授、1986 年に教授に昇任されています。

先生は、東京大学に提出された修士論文では、ポッパーとウェーバーに関する考察を通じて方法論的個人主義について研究されています。その後先生は、主に計量的手法を用いた階層研究に進まれます。また、ファラロの数理社会学に関する著書の分担翻訳もされています。安田三郎博士が開発した開放性係数に関する論文を『関西学院大学社会学部紀要』第 40 号に寄稿されるなど、日本の社会学において、当時はまだ十分に展開はされていなかった計量的アプローチによる実証研究をいち早く展開されました。

その後、先生のご関心は、社会進化論に向かわれました。「社会変動論」の講義ではその一端が講じられています。それは、人間社会を「進化した協力システム」として捉えるアプローチで、生物学、考古学、人類学の知見から、「ヒト化」の過程、とりわけバンドが共同狩猟を通じて、「社会的協力」をはじめて可能にしていた点を明らかにされようとしています。最終講義で見せていただいたキリンの共同狩猟の映像は大変興味深いものでした。社会学において、近年、進化の問題はルーマンなどによって取り上げられてはいるものの、進化の起源については、ほとんど言及されることがなくなっています。しかし、社会学を学ぶ学生にとって、知っておくべき知識であることをあらためて認識させられました。

ポッパー、計量的アプローチ、社会進化論という先生のご関心からわかるのは、常に社会学を思弁的な学問ではなく、経験科学のひとつとして捉えようとする姿勢ではないかと思われます。先生のこうした姿勢は、入学試験制度の運営や改革など、学部運営においても活かされています。1979 年から社会学部に在籍されておられる、まさに重鎮中の重鎮である先生が、今年の三月をもって退職されるのは、大変惜しまれることですが、現実を冷静に、そして実証的に捉えようとする姿勢を、われわれは、今後も長く引き継いでいかなければならないとあらためて感じております。